



ということが一目瞭然で分かるように、その部分だけ取り出している聖書なんですね。

創世記からマラキ書まで旧約聖書の全て、39巻全部にメシアに関する預言が書いてある。その預言はイエス・キリストの生涯においてズバリ実現していることを、ピンポイントで分かりやすく証明しているんです。これが、350か所以上の預言があるということを言っているんです。

これを読みますと、もし旧約聖書を神の言葉として素直に信じ研究しているならば、イエスが登場した時、自分たちが前もって知っている情報に完全に合致するということが分かるので、答え合わせのように“この方がメシアだ！”と一発で分かるはずなんです。

ピンポイントで書いてあるんです。この方以外にないということが分かるんですね。

旧約聖書はイエスがメシアであるということの史上最強・完璧な身分証明書であることが分かる。

旧約聖書でイエスがメシアであることがハッキリ分かる。それを確信させてくれる本なんですね。

英語読める方はこれ持ってたらいいですよ。ちょっと紹介しておきますと、ボアズ・マルチ・メディア、オランダの会社ですが、多分インターネットで入手できるんじゃないでしょうか。非常に素晴らしい書物です。

さて、旧約聖書に精通しているならば、もしイエスを見たなら、“ああ、旧約聖書で紹介されている人物はこの方だ”とパッと分かるはずなんです。

ということは、ユダヤ民族はどの民族よりも、イエスが来た時にメシアだと見破ることが出来る・反応することが出来るはずの民族なんです。というのは、旧約聖書についてどの民族よりも詳しく研究していた・よく勉強していた・よく分かっていた民族なんですね。

ところが実際には、イエスを見た時、“彼はメシアなんかじゃない。むしろ悪魔の力で働いてるんだ！”とイエスを拒否してしまったんです。

イエスがメシアである証拠を誰よりも詳しく知っているはずのユダヤ人が、なぜ実物のイエスを見た時、救い主として受け入れることが出来なかったんでしょう？

その答えはズバリ、彼らは旧約聖書を神の言葉として信じているだけではなく、旧約聖書以外の人間の言葉も、聖書と同じような権威を認めてしまっていた。

あるときは、聖書以上の権威をその考えに認めてしまっていた。

もっと言うならば、聖書だけを神の言葉として信じていたなら、イエスがメシアだと分かったはずなのに、聖書でないものまでも聖書と同格の権威あるものとして受け入れてしまっていた。

そのため勿体ないことに、メシアが来た時に分からなかった。

“神の言葉でないものを、神の言葉として受け入れてしまっていた”ということが、イエスにつまづいた大きな理由だと言えるのです。

さて、イエスがユダヤの国にお生まれになった1世紀、それをさかのぼること約600年ほど前、ユダヤ人たちはバビロンという国に滅ぼされ、捕虜として連れて行かれました。

国家が無くなるということは惨めなことだと思います。

彼らはよそ者として・寄留者としてバビロンで生活するのですが、国を失った悲哀を味わったわけですね。

色んな経緯があって、やがてもう1度 独立国家を持てるようになるのですが、その時ユダヤ人たちは心に決めたんです。「滅ぼされるようなことは二度とさせないぞ。」「国が亡びるような誤った選択は二度としてはならない。」非常にナーバスになったと思います。

ところで、ユダヤの国がバビロンに滅ぼされた理由はいったい何でしょう？  
軍事力が乏しかったからでしょうか？ 経済力があまりなかったからでしょうか？  
人口が少なかったからでしょうか？

いいえ。表面的には、理由は色々後付け出来るかもしれませんが、聖書によると、究極的な根本的な理由は、ユダヤ民族が神との契約を破ったからです。“もし神との契約を破るなら、このような呪いが来る”とモーセ契約・シナイ契約の中に明記されていたんですね。  
ユダヤ人たちは偶像を拜んで、創造主なる神・イスラエルの神を捨てた。決定的に捨てた。  
ということで、国を失ってしまったんです。

そこで、もう1度国に戻って来た時、彼らは二度と国を追われないようにするために、何が何でも神の契約を守ろうと考えるんです。  
その時、神の契約そのものを緻密に調べ 研究し それに向き合っていく以上のことをやっちゃうんです。余計なことをやっちゃうんですね。

神のルール・神の律法を破らないようにするために、神の律法以外のもっと厳し目の・もっと厳格な・もっと堅苦しい・もっと色々な決まりをゴタゴタ作って、それを守れているなら神の律法も守ることになるだろうということで、神の律法以外のものを勝手に付け足していってしまうんですね。

さて、今からお話することは、ある立場ある方から聞いた話です。信用できる方です。しかし、私は実験で確かめたわけではないので、信じるか信じないかは皆様にお任せしたいと思います。

日本で作られている車のスピードメーターは、ある一定のスピードを超えますと、実際に走行しているスピードよりも10キロ高めに表示されると言うんです。  
実際のスピード80キロで運転している場合、スピードメーターには90キロと表示される。  
100キロで運転しているつもり、スピードメーターは100キロ。だけど、実際のスピードは90キロだと言うんですね。これ実験したことないし、本当のところは分かりませんが、非常に立場ある方が私にコソコソ言ってくれたことなので。これは皆さん、どっちか分かりませんよ。

「何でそんなことするんですか？」と聞いたんです。そしたら「人間はルールを破るものだ。法定スピードよりもついつい飛ばしてしまう。スピードメーター表示が実際の走行速度よりも10キロ速めだったら、“こんなに飛ばしてる”ということでブレーキ踏むじゃないか。法定スピードを守らせるために、実際よりも厳しい基準が目に入るように設計されているんだ」と言うんです。

これが、ユダヤ人たちがやった論理なんですよ。  
色んなルールがある。神様が決めた色んな決まりがある。律法がある。しかし、万が一破ってしまうかもしれない。細心の注意でそれを守ろうとしていても、破ってしまうかもしれない。  
なので、よりきつめ・より厳し目・より厳格に・より堅苦しく、ギューツとあれこれあれこれ、旧約

聖書に書いてない決まりを、次から次へと付け加えていったんですね。

付け加えた様々な決まりのことを『口伝律法（くでんりっぽう）』と言います。文書化はしなかったんです。当初は。これは自分たちの考えでやる。学者たちは、特に旧約聖書の一つひとつの言葉に対する解釈をしたんですね。この解釈のことを『ミシュナー』と言います。学者の解釈に対して、今度は注釈を付けるんです。これが『ゲマラー』。

ミシュナーとゲマラーが口伝律法の殆どの部分で、やがてこれが文書化されて『タルムード』という本になります。タルムードの大半はミシュナーとゲマラーだと言っていると思います。

口伝律法によって、本来書かれていない色んなことがゴチャゴチャくっついて来るわけですね。例えば、律法の中にはユダヤ人たちへの命令で、“安息日（あんそくにち）を守りなさい”というルールがあります。“週に一日 土曜日、休みなさい。”これは神の命令なので、“休んでもいい”じゃなくて“休みなさい。休まなければならない。”

休まなければならないのは誰かということ、一家の主人だけじゃないんです。使用人も奴隷も、飼っている牛やロバや羊も、みんな綱をほどいて解放してあげなさい。1週間に1回、ユダヤの共同体の中では、みんながのんびり出来る解放される日があったんですね。これは命令なので主人も聞かなきゃならない。命じてもらえない限り休めない立場の人にとっては、この律法はありがたかったと思いますよ。

しかし“安息日は休め。仕事をしてはならない”と書いてあるけど、仕事の定義は何なのか、厳格に決めてほしいと変わってしまったんですね。例えば、週に1回 土曜日の安息日、朝昼晩食べるじゃないですか。主婦が料理をする家事・料理作りは仕事じゃないんですか？物を温める時火を点けます。火を点けるのは仕事ではありませんか？あるいは、眼鏡を掛けてて落とした。これを拾うのは作業ではありませんか？仕事のうちではありませんか？

安息日に病気になって病院に連れて行った時、お医者さんが診察したら、仕事をしたことになるのはありませんか？その場合、安息日を破ったことになるのかならないのか、それを喧々諤々ずーっと語り合うのですが、口伝律法では、安息日に病気を治すことは…アウト！だったんですね。

しかしバイブルを見ますと、安息日は何のためにあるかということ、命あるものを解放するためです。命あるものをゆるませて、寛がせるためでもあるんですね。

ところが、“病気の人を安息日に治すのは仕事になるから駄目だ！”と口伝律法にあるんです。その場合どう考えるかということ、口伝律法でそういうものが出来上がっている場合、それは罪だと当時のユダヤ人たちは考えたんです。

ところで、イエス・キリストのところに色んな病人が運ばれて来て、また彼は、色んな苦しい目に遭っている人たちを訪れました。

苦しんでいる人たち・悩んでいる人たち・痛んでいる人たちが目の前にいた時、イエス・キリストは安息日であったとしても癒したんです。それを見た時「あ、律法を破ってる！」  
いいえ、破ってません。口伝律法は破ったけど、律法は破ってない。

だって、律法にこう書いてあるんです。「安息日に、もし牛やロバなどの動物が井戸に落ちたら引き上げる。動物でさえそうしてあげるんだったら、ましてや人間を助けてあげるのは当然のことでしょ」とキリストは仰ったんですね。

「あなたたちは自分たちの言い伝えのために、神の言葉を無駄にしている。神の言葉を換骨奪胎（かんこつだつたい）、骨抜きにして意味のないものにしている。」当時の宗教学者たち・指導者たちをビシッと叱りつけたのです。彼らのプライドは非常に傷ついたんですね。

そして、「イエスという男は神の言葉を踏みにじった！」と言うのですが、踏みにじってません。イエスがノーと言ったのは人間の考えに対してであって、“そもそも律法は人間を苦しめること・人間が不幸になることを意図して語られているものではない”と本質を掴んでおられました。ここに、ユダヤ人たちがイエスを拒否した大きな理由があるのです。

イエスがおられた当時のユダヤ指導者たちは、神の言葉でないものを神の言葉と同格に捉えていました。そして、ある場合、神の言葉よりもっと権威あるものとして受け入れてしまっていたんです。彼らが採用している基準は神の言葉ではない。その神の言葉ではないものに基づいて、“イエスはメシアではない”と断罪し拒否してしまっただけなんです。

神の言葉のことを正典（せいてん）と言い表します。  
ヘブライ語では“カーン”。葦（あし）のことです。真っ直ぐに生える竹みみたいな植物。  
葦はその形態を利用して、定規や物差しとして使われたんですね。  
そこから、物差し・基準を表す言葉として、カーンという言葉が使われるようになりました。  
そして、“ここからここまでが神の言葉”という正典の意味にカーンが付けられたんです。

カーンはギリシア語で“カノン”。正典・規範・模範・基準という意味で、神の言葉はカノンです。  
カノン/神の言葉は、旧約聖書 39 巻・新約聖書 27 巻だけなんです。

ところで、カメラのメーカーにキャノンがありますよね。戦前からある会社で、元々 精密光学研究所という名前でした。固い（かったい）名前ですねえ。  
彼らは一生懸命、最初の精密小型カメラを作りました。ぜひ売れて欲しい。大ヒット商品になるためには観音菩薩の慈悲にすがるとしかないと考えたんです。創業者は観音菩薩信仰だったんですね。  
それで、第 1 期目の小型カメラの名前がカンノン。

しかし、世界全体をマーケットにして、世界中に自分たちのカメラを売って行こうとする時にカンノンではね、ちょっと名前のインパクトが小さい。欧米人がみな既に知っている単語で、“Oh!” と一目置くような権威ある名前の方がいい。でも、カンノンも捨て難い。  
そこで、カンノンに似ていて、しかも“基準”という意味の言葉があるよ！ カノン。  
これがキャノン/Canon という社名の由来なんです。

キャノンはカノンなんです。基準なんです。正典。カメラの基準はキャノン。よう言いましたね。すごい自信じゃないですか。優れたメーカーだと思うんですね。

さて、聖書の正典は旧約 39 巻・新約 27 巻・合計 66 巻、これだけです。これ以外に正典/カノンは 1 冊も存在していません。この 66 巻だけなんです。なぜこの 66 巻が正典と定まったのかについては、別の動画でご紹介したいと思います。

旧約聖書の中に、このような言葉があります。（\*聖書 新改訳 2017）

申命記（しんめいき）4 章 2 節

私があなたがたに命じることばにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。  
私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を守らなければならない。

箴言（しんげん）30 章 6 節

神のことばに付け足しをしてはならない。神があなたを責めて、あなたが偽り者とされないために。

聖書は“勝手に人間の考えをつけ加えて、それを聖書のように格上げしてはならない”と言っているんですね。

実は、キリスト教と名乗るグループの中に、キリスト教と似て非なるもの、全く正統信仰と呼べない組織・集団がいくつかあるんです。

異端と呼ばれていますが、このグループの方々にはいくつか特徴があって、その 1 つは、聖書/正典の他に自分たちの教祖が考えた独自の正典を持っているんですね。

この独自の正典に基いて聖書を解釈するので、当然合致しない内容については、後から持って来た独自の正典に合致する解釈に変えていく。そうすることで、正典の中身そのものが骨抜きにされてしまうんです。そんな問題が起こってしまうんですね。

だから、教会と名前が付いているからと言って、みな安心するわけにはいかない。キリストとかキリスト教会と名前が付いているからと言って、皆がみな正しいとはとても言えないんですね。

「正典は旧約 39 巻・新約 27 巻だけですか？」と確認する必要があると思います。

ところで、私は格闘技が大好きなんです。柔道を始めとして、ボクシングもキックボクシングも総合格闘技も、体一つ武器にして競い合う競技を見ているだけで、非常に血沸き肉躍るんですね。

このような自分の肉体だけで競い合う格闘技は、一般的には体重別に競うのが原則です。

やっぱり体重が重い人の方が有利。力が強いんですね。

なので、フェアに競い合うために、体重別ということを非常に厳格にするんです。

ですから、競技本番の前日計量が必ず行われます。前日計量で基準体重内に抑えていることを、一般公表の目の前で体重計に乗って、紛れもなくクリアしていることを証明しなければなりません。

これ大変なんです。というのは、大体の格闘家たちは 10 キロくらい減量するんです。

しかも、肉体のパフォーマンスを落とさないために、まあ大変な苦勞をなさるわけですね。

皆が見てる前で体重計に乗りますが、その体重計は殆どが未だに分銅式です。

分銅式体重計はいわゆる天秤ですね。分銅の重りを付けて、その人の体重を目視で確認するという非常に原始的な体重計に乗って確認します。それは、体重計の構造が単純であればあるほど、嘘ごまかしが効かなくなるからです。非常に公明正大に体重を量るということなんですね。

もし前日計量で体重計に乗った時に、基準をオーバーしていたらどうなるんでしょうか？  
たとえチャンピオンであったとしても失格です。失格だけではなくて、自分が保持しているチャンピオンベルト・タイトルは剥奪されてしまうんですね。非常に厳しいんです。  
なので、競技者は戦う前に まず自分との戦いがある。

以前こんなことがありました。競技者が体重を落とすために、1週間ほど大会会場の近くのホテルに缶詰めになって、体重をドンドン落としていくんですね。水抜きと言って、体中の水分を抜いて行くんです。そうして、体重が下っていくのを確認するために、ホテルに持ち込んだ電子式デジタル体重計に乗って、“あと3キロだ” “あと2キロだ” “あと500グラムだ” “クリアした！”  
そして、前日計量の会場に行って、分銅式体重計に乗った時、オーバーしていた。失格。  
…ということがいくつかあったんです。

いったい、なぜそんなことが起こったんでしょう？  
この人が持っていた電子式デジタル体重計に誤差があった・狂っていたということです。  
分銅式の方が、原始的ではあるけど1番確実だということなんですね。

今まで一生懸命努力して来ました。体重落として来ました。トレーニングして来ました。  
しかし、当日を迎えることなく失格。この人の問題はどこにあったんでしょうか？

“狂った基準を基準にして安心していた” というところです。  
“間違ったものを正しい基準と思って受け入れて安心していた” というところに、大きな問題があったんですね。  
基準を間違っ、その間違っ基準に基いて自分自身をクリアだと安心させても、やっぱり正しい基準の前には門前払いを食らってしまうんですね。

聖書のカノンは旧約39巻・新約27巻だけです。  
なぜ今のユダヤ教の人たちは、イエスをメシアとして受け入れることが出来ないのでしょうか？  
大きな理由の1つは、カノンでないものをカノンとして受け入れているために、カノンとガッチリ合致するイエスのメシア性に気づくことが出来ないところにあるのです。

このシリーズでは、カノンに基いてこれからも続けていきたいと思っておりますので、どうぞ皆さん、またお付き合いください。  
それではまた『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。さよなら!!